



みはら玉手箱



平成25年4月21日（日）に開講した「平成25年度 市民学芸員実践講座」は、10ヶ月のカリキュラムを全て終了し、平成26年1月19日（日）、めでたく閉講式を迎えました。

平成25年度市民学芸員実践講座

閉 講 式



- | | |
|----------------|---------------------------------|
| 1. 閉講式開会挨拶 | 教育部長 |
| 2. 各グループの活動発表 | 情報発信グループ
収集グループ全3班
体験グループ |
| 3. 同上の講評 | 教育部長
生涯学習課長
三原市文化財協会会長 |
| 4. 平成26年度の講座予定 | 生涯学習課職員 |



〔活動発表の様子〕

橋本敬一先生

この閉講式における、各グループの活動発表内容について報告します。

(1) 情報発信グループ

三原市役所生涯学習課ホームページの「みはら玉手箱」という欄に、市民学芸員の活動状況と市内の祭り・石碑・狛犬を地域単位で順番に紹介しました。

平成25年6月	第4号発信
平成25年9月	第5号発信
平成25年12月	第6号発信
平成26年3月	第7号発信予定

(3) 体験グループ

(イ) 平成25年5月12日(日)、平成25年度「三原ふるさと子ども博士講座」の第一講座で新高山城跡登山の案内役を務めました。

(ロ) 平成26年1月19日(日)
第1回 三原城下町ウォーク」を実施。広島・東広島・尾道からの遠方者も含め86人参加。



(2) 収集グループ ; 三原市歴史民俗資料館・中央図書館等に保管されている古写真を3つのグループが分担してデジタルデータ化の上、編集し、以下の形で公開または公開準備中です。

(a) 第1班

写真集

「古写真で見る三原情景Ⅱ」

—大正から昭和のあゆみ—

平成8年に開催された市政施行80周年記念展でパネル展示された231点の古写真から73点を選び、港、スポーツなど9項目に分類して収録しました。平成26年2月発売です。



〔沼田川の渡し〕

(b) 第2班

市民学芸員企画展示

「宮本常一氏の歩いた昭和の三原市」

平成26年1月19日(日)～26日(日)の期間、ペアシティ三原西館 市民ギャラリーにて展示。日本民俗学の権威者宮本常一氏の撮影された膨大な量の写真の中から三原関係の210枚を選択し、現状との比較も取入れて展示しました。850人の入場がありました。



(c) 第3班

「山陽鉄道ものがたり 三原～広島間開通

120周年記念」

(準備作業中)

かつての山陽鉄道、その後の山陽本線を走った「蒸気機関車」から「新幹線」までの足跡をたどり、その歴史的意義を検証するべく、三原市が講演会や模型走行、各種展示を企画・立案中です。

第3班としては、その為の古写真等資料調査に協力してきました。

みはら おもしろクイズ



(解答はこの頁にあります)

だるまさんの (七) 変 化

三原神明市のシンボル、日本一大だるまは、昨年4代目に世代交代しました。デビュー一年目は、青い目の偉人さんのようでしたが、一年経った今年は、すっかり三原に馴染み、顔つきも大きく変わりました。その七変化振りをじっくり観察してみましょう。



[平成25年 2月]

身長 3.9m 腹部直径 2.9m 体重 500kg

頭頂部

額 長いしわ一本

みけん しわ一本が見える

眉毛 みけん側の縁は丸い

目 白目と目の縁が青い
黒目が小さく、ひとみが黒目の中心にある

鼻 小鼻が縦長

穴は縦長で間隔が広い

頬 一部ピンク色で幅が広い

口髭 薄い

口 上下の唇鮮明



[平成26年 2月]

変化なし

記録的な雪が降ったので、白い雪の帽子を被っているが、変化なし

赤い法衣が目深になり、額が狭くなった

しわが三本に増えた
みけんの幅が狭まった

みけん側の縁は三角形にして伸びている

白目は肌色、目の縁は黒くなった
黒目が大きくなり、目全体は広がったが
ひとみは黒目の中心より内側になった

小鼻は典型的日本人に近い

穴は丸く間隔は狭い

赤い法衣と口髭で隠れてスリムに見える

厚くなり、もみあげにも達している

顎髭のため、下唇は隠れている



だるまクイズ

大だるまのひとみ部分は、突起が付きまして。平成26年になって、目の間隔が広がりましたが、このひとみの位置はどうなったのでしょうか？

(ア) ひとみの突起を付ける時、上下左右に移動した

(イ) ひとみの位置はそのまま、大きくした黒目を上下左右に移動することにより、ひとみを黒目の中心から外した



三原のお祭り



3/7

神明さんと「ぬた」

備後路に春を告げる「神明市」は、三原を代表するお祭りです。神明とは、伊勢信仰に由来するもので、室町末期、神宮から全国に下った神社の世話役である「御師（おし/おんし）※」により、全国に神明信仰が広められ、三原にも伝わりました。それが以前から民衆の間で行われていた「とんど」の行事と一体化され、神明祭となりました。三原ではとんどを「お山（おやま）」といい、祭りの御神体です。

往時（室町末期）、旧暦正月14日、九つの町組が寄り合い、受け持つ神明に趣向を凝らした飾り付けをして祀りました。とんどをまき、伊勢神宮の幣を勧請し、町内の店先に翁人形やだるまを飾り、東町、館町一帯には数百の露店が立ち並んでいました。こうして次第に市場祭として発展していきました。

そこに殿様をはじめ、芸予・安芸の島々や山間部から多くの人々が参拝に来て、九つの神明を順にお参りすれば、伊勢神宮に参拝したと同じ御利益が得られるとして、人々は賑やかに楽しみながら、祭りに繰り出していました。

神明の前では市が立ち、参拝の人々が地元の産物を持ち寄って交易し、平素取引のある家には祝い餅を持って挨拶に行きました。地元町組の人たちも、それを迎えて膳を作って供し、饗応に努めました。70～80の膳は当たり前、毎年訪れるお馴染みさんを接待することは、祭りのなかでは女性の大切な役割でした。



〔お山（とんど）〕
東町神明本殿前



〔神明本殿〕

時代とともに、祭りの中身は変わりましたが、接待する風習は、現在も大切に引き継がれています。

そのもてなしに、今も昔もなくてはならない料理があります。それは「ぬた」。神明さんといえば「ぬた」。何があっても欠かすことのできない一品なのです。瀬戸内の海で採れる新鮮な「まて貝」と、これまた瀬戸の陽光を浴び、木原の山の斜面で育った「わけぎ」。炒めるか湯がくか、すいか甘いかな、白味噌の香り豊かに、その家の女性が代々伝えてきた伝統の味です。



〔わけぎのぬた〕

わけぎは、新鮮野菜の少ない冬のビタミン源として、また、株分れにより「種球」という沢山の球根が育つため、子沢山で子孫繁栄の縁起物とされたのかも知れません。

現在、わけぎの生産量は広島県が全国一位。独特の風味と品質の良さから市場で高い評価を得、「広島わけぎ」の名で親しまれています。かつて、わけぎといえば木原でした。しかし、斜面での重労働が厳しく生産農家は減り、現在では佐木島など、島嶼部に生産の中心が移っています。東町の古老が、昔を懐かしむように「木原のわけぎは斜面にしっかり根を張るから、肉厚でやわらかかった」と、話してくださいました。

（参考文献：白松克太著「三原昔話」、三原商工会議所ホームページ）

※ 伊勢神宮に於いては「御師」を「おんし」と言います。

石碑が語る三原の歴史

神明祭の行われる東町は三原城が築城されると、城下町として最初に栄えた町です。また、その北の中之町は西国街道が海岸に造られる前の中世の山陽道が通っていたところです。今回はこの周辺の道標、石碑、句碑を探ってみます。

道 標



〔光谷分れの道標〕



〔左は光谷への道 右は深町への道〕

〔中之町旧道の道標〕

三原から深町経由で尾道へ通じる県道55号線の中之町2丁目フードガーデンニチエーの手前交差点から山手へ少し行くと、第二中学校の裏手からの道と出会います。ここに大正15(1926)年に道路改修記念として建てられた一辺26cm 四方、高さ100cmの道標があります。

正面には「大正十五年一月 改修道路 山中村下組青年団」、左面には「左ハ光谷へ通ス」、右面には「右ハ深田村へ通ス」と彫られています。山中村は現在の中之町で、深田村は現在の深町です。

江戸時代になり、現在の国道2号線のもととなった西国街道が整備されますが、中世の山陽道は、現在の尾道市の美ノ郷から深町、中之町を通る山手の道が主幹道路となっていました。豊臣秀吉が九州へ下る時、この道を通して三原城へ入ったといわれています。我々は「太閤の道」が何処か探っていますが、中之町は近年急激に住宅化して、古い道が分かりません。この道標は古い道の貴重な証しとなっています。

記念碑



〔移設後の石碑〕



〔東町妙正寺跡付近〕

妙正寺は延宝2(1674)年に三原城主浅野家の菩提寺として米田山の麓に建立されましたが、享保8(1723)年に本町の現在位置に移設されました。

本町の妙正寺の山門の正面左に、高さ145cm、幅76cmで正面に「南無妙法蓮華經」と大きく彫られた立派な石碑が高さ45cmの台の上に建っています。この石碑は昨年、平成25(2013)年4月に東町の妙正寺跡付近の民家の庭から本町の妙正寺の山門前に移設されたものです。碑文は次の通りで、槍術の佐分利源五左衛門重武が安政4(1857)年4月に奉納し妙正寺跡に建てたものです。

正面

天下泰平五穀成就和合同心万民快樂
南無妙法蓮華經 中山大僧都 日意
一天四海皆帰妙法広宣流布全法久住

横面

安政四^丁_e歳四月吉祥日成就

裏面

願主 行照
日體 行真 日淨
奉納 御題百十萬部
諸精靈戒名
御經数万卷
御宝塔右施主
佐分利源五左衛門重武

(※裏面の文字は散乱配置なので、読みやすいように配置替しました)

当初建立された妙正寺の跡は何処か特定できませんが、現在の東町3丁目のカトリック教会の西の下付近と思われます。ある時期までは妙正寺跡として残っていたようですが、山陽鉄道(現JR)の架設や道路の改修等により、その跡地としては消滅してしまいました。安政4(1857)年に妙正寺跡に建てられたこの石碑は、長らく近所の民家の庭で保管されていましたが、上記のように昨年本町の妙正寺の山門前に再度移設されました。

句碑・詩

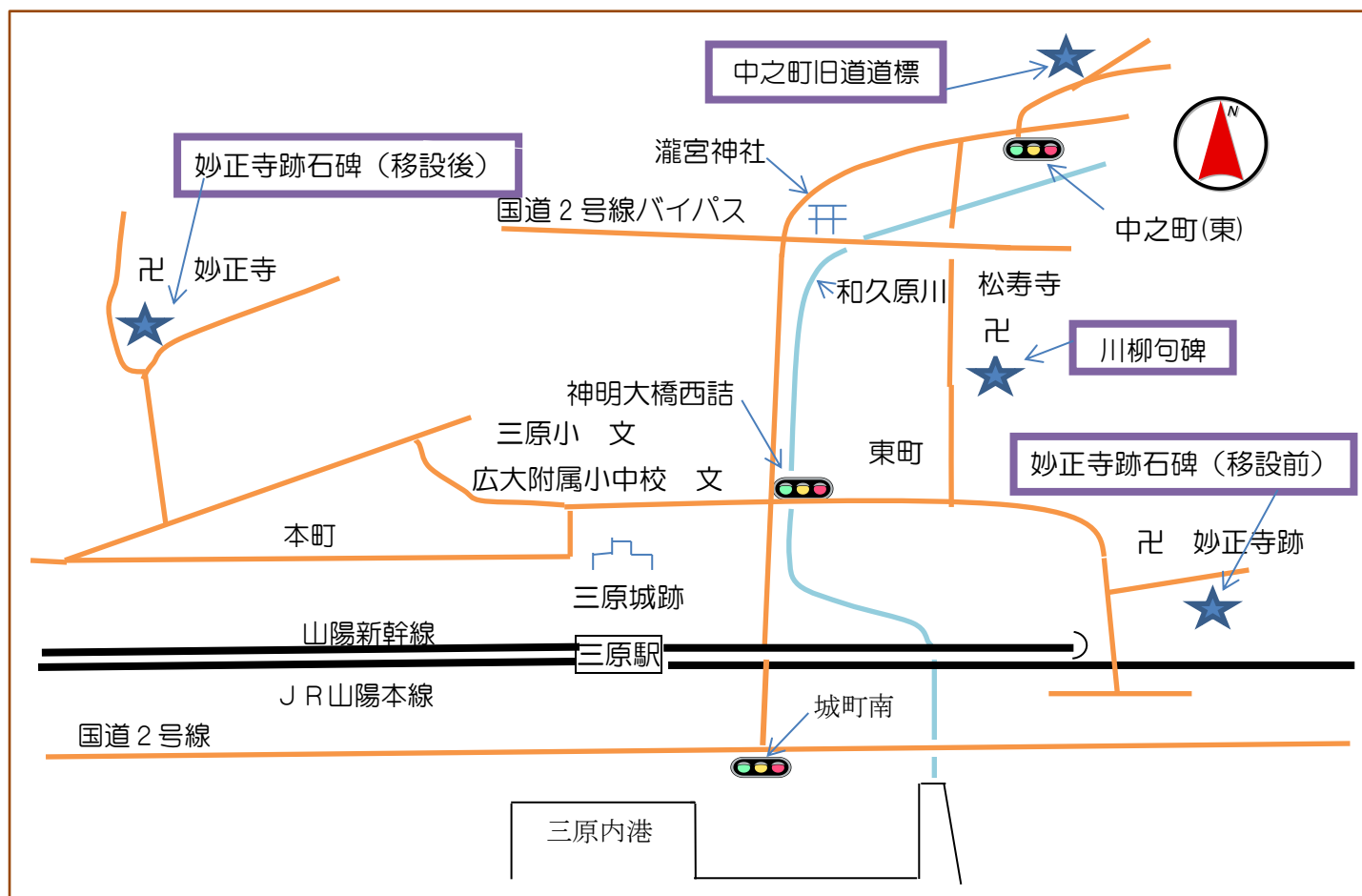


〔松寿寺の川柳句碑〕

東町の松寿寺の境内に、高さ 170cm、幅 90cm の立派な川柳の句碑が高さ 100cm の台座の上に建っています。碑文は「仕込桶 三原よいとこ 冷でよし 水府」と彫られています。これは松寿寺で開かれていた、旭町の八島白龍を代表とする川柳の会の師匠大阪番傘会長の岸本水府が酒どころ三原を詠んだもので、昭和28（1953）年3月に建てられました。他に松寿寺の本堂玄関には文部大臣や衆議院議長を務めた故灘尾弘吉の扁額「老松心」が架けられ、武者小路実篤、高津正道、石丸悟平、中山マサ、横井弘三等多くの文人、政治家、画家が参禅し、あるいは作品制作のため逗留しています。

松寿寺の境内に立派な松があり、枝の支えの石柱に逗留された有名人の詩歌が彫られていました。残念ながら松は枯れましたが、今も石柱は大切に保存されています。

概略マップ





三原にある狛犬



7/7



今回は、登町・幸崎の狛犬を紹介します。（説明文は「広島県神社誌」を参照しました）

1 2. 正時神社 三原市登町5221

由緒、創立年月不詳。古老の言によれば元亀3（1572）年小早川隆景の再建。古くは田野浦村全郷の総鎮守でした。なお、永禄年間（1558～70）宗郷沖に分霊しています。



	単位：cm		
	高さ	幅	奥行
阿形	50	18	40
吽形	50	18	40
年代	天保6（1835）年8月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



1 3. 幸崎神社 三原市幸崎能地

由緒には、神功皇后、西討の砌（みぎり）、御船を寄せ給うに好適地なればサワイの井と仰せられ、この地の丘に登られ東西を御覧になり、「能（よ）き地かな五穀豊饒すべし」と宣（のたま）いによりこの地を能地や才崎（佐江崎、幸崎）と称すとあります。



	単位：cm		
	高さ	幅	奥行
阿形	100	70	33
吽形	110	64	30
年代	安政4（1857）年		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



1 4. 久和喜神社 三原市幸崎久和喜3115

「芸藩通志」によれば、「八幡出雲神社、田野浦村にあり、二神同殿、出雲神は大己貴命（おおなむちのみこと）を祭る」とあります。勧請年月は不詳ですが古老の伝によれば、文亀年間（1501～4）大穴牟遲神（おおなむちのかみ）を出雲より、八幡宮を宇佐より勧請したと伝わっています。



	単位：cm		
	高さ	幅	奥行
阿形	85	57	30
吽形	88	57	31
年代	天保11（1840）年		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		

